

ランドセル

新潟第一中学校

一年末 崎 悠 紀

ぼくはこの春に小学校を卒業し、中学生になりました。そして、あるボランティア団体を通して、六年間使い続けたランドセルをアフガニスタンの子どもたちに贈りました。このボランティア団体によると、ランドセルをアフガニスタンの子どもたちに贈るプロジェクトは二〇〇四年から始まり、今年で十二回目になるそうです。また、これまでに約九万個のランドセルが贈られたそうです。

アフガニスタンという国は、実はほとんど知らない国でした。この国を知るきっかけは、昨年、ノーベル平和賞を受賞したマララさんのことを新聞記事で読んだことです。マララさんは、アフガニスタンの隣の国のパキスタンの人です。パキスタンでは、当時、女性が学校に通うことに反発するグループがいて、マララさんを銃で撃つという事件があったそうです。しかし、マララさんは瀕死の重傷を負ったにもかかわらず、奇跡的に回復すると、引き続き、すべての子どもたちが教育を受ける権利を訴えて活動しています。マララさんは言っています。「一人の子ども、一人の教師、一冊の本、そして一本のペン、それで世界を変えられます。教育こそがただ一つの解決策です。」マララさんに比べたら、今のぼ

くに行けることはあまりありませんが、でも、できることから始めたいと思い、ランドセルを贈ることにしました。

ぼくのランドセルは、祖母がプレゼントしてくれたものですが、もともと、小学校入学前に亡くなった祖父がプレゼントすると約束してくれていたものでした。当時、祖父母の家に遊びに行くたびに、祖父は、「小学校に入学したらランドセルを買ってあげるからな。」

と書いていました。ランドセルは、亡くなった祖父との大切な思い出の一つでもありました。このようなランドセルは、大切な宝物にしておきたいという気持ちもありましたが、家に飾っておくよりも、必要な子どもたちに使ってほしいと思いました。

今回、ランドセルを贈ることを通して、多くのことを学ぶことができました。まず一点目として、アフガニスタンをはじめ、世界の国々の中には、まだ満足に学校に通えない子どもたちがたくさんいるということです。ランドセルを背負って楽しそうにしているアフガニスタンの子どもたちの姿をホームページの写真で見ると、とても幸せな気持ちになりました。ボランティア活動に取り組む意義が少し分かったような気がします。

二点目として、ボランティア団体の説明の中に、アフガニスタンはイスラム教の国なので、豚革製のランドセルは贈ることができないという説明があり、世界の中には、自分たちと違う常識をもった人たちがいることを知りました。そして、そのような違う考え方をする人たちのことを避けるのではなく、よく理解し、付き合っていくことがこれからの時代は特に必要だと思いました。

三点目として、ランドセルはとても丈夫で長持ち

するものだということがよく分かりました。ランドセルの中に教科書やノートをたくさん詰め込み、毎日背負って小学校に通っていました。小学校を卒業する頃になってもほとんど傷みはなく、まだまだ使える状態でした。一度使ったものを、そのまま、また再利用することを「リユース」と言いますが、中学生になると、中学生用の通学かばんを使うようになるのでランドセルはリユースにとても適したものだと思います。ただ、ぼくのように、日本の子どもたちは新品を買い与えてもらうことが多いので、リユースする人は多くないと思います。したがって、通学かばんを必要とする外国の子どもたちに贈ることは、とても良いアイデアだと思います。なお、海外では今、日本のランドセルが人気となっているそうです。ファッションの一部にもなっているそうです。ランドセルは、実用的なだけでなく、ファッションとしても優れているもののようにです。最後に、ランドセルを贈ることを通して、あらためて感じたのは、ランドセルをプレゼントしてくれた祖父母への感謝の気持ちです。その感謝の気持ちを込めて、アフガニスタンの子どもたちにランドセルを贈りました。この感謝の気持ちを受け取ったアフガニスタンの子どもたちも、きっと、また次の人に感謝の気持ちを渡してくれると思います。こうして、世界中の人が感謝の気持ちでつながるといいなと思います。

作文を書くに当たって

大切な宝物として残すか、それとも必要とする人のために役立てるか、実は悩みました。今は贈ることにして良かったと思います。感謝の気持ちを大切にすることや、人の役に立てることの喜びなど、ランドセルを贈ることを通して、多くのことを学ぶことができました。